OBIRAME 24
Newsletter Jan.2006

尻別川の未来を考える
オビラメの会

オビラメの会ニューズレター24号のおもな記事
再導入河川復元、ここが課題だ！—p2／放流稚魚たち元気です—p3
パタゴニア社が当会に助成／おすすめbook『希少淡水魚の現在と未来』—p4／淡水魚保全シンポに参加して／イトウ保護フォーラムinさるふつ参加報告—p5

草島清作オビラメの会会長 伊東和紀・後志支庁長と会談

倶登山川（再導入モデル河川）の落差工改修に光明？

伊東和紀・後志支庁長（右）に要望を伝える草島清作会長

尻別川水系倶登山川流域でイトウ再導入を試みている当会の草島清作会長は10月18日、イトウが自然繁殖するときの障害になると考えられる同川の落差工の改修を求める要望書を伊東和紀・北海道後志支庁長に手渡しました。草島会長と伊東支庁長は１時間あまりにわたって会談。改修実現の可能性を探るべく、支庁が窓口になって関係機関と当会の協議の場を設けることになりました。

尻別川流域でイトウが自然繁殖できる環境を探し歩く「プロジェクト2001」（2001年～）を経て、当会が再導入の最初の実験地として選んだ尻別川支流倶登山川。改めての事前調査のうえ、その２本の支流に初めて人工孵化稚魚を放流したのは2004年秋でした。翌05年６月には周辺の３小学校と共同で稚魚放流会を実施し、当会「モニタリングチーム」によるおりおりの追跡調査で、放流魚たちが順調に成長していることが確認されています（２～３ページに特集記事）。

ところが、これから放流イトウたちが分散していくと考えられる倶登山川本流などには、いくつかの落差工が設置され、成長したイトウが回帰してきたとき（早ければ2008年ごろ）、乗り越えられないと予想されます。これらの落差工を今のうちに改修し、魚が自由に行き来できるようにできるかどうかが、再導入実験成功のひとつの鍵を握っているのです。そこで当会は今回、後志支庁長に対して「イトウが安全に遡上・降下できるように河川構造物に改修を施してください」と要望しました。

後志支庁は2004年度から「尻別川のお魚守りたい」事業を独自に進めています。この日、草島会長から当会の活動内容と要望を聞いた伊東支庁長は「総論としては全く異論ありません。（落差工など河川構造物の所有・管理には複数の官公庁が関わっているので）一度関係者が集まって共通の意識を持てるようにしましょう。（従来とは異なる）もうひとつの大きな視点の取り組みが必要かも知れませんが、その実現のためには、地域のみなさんにも大きな声を上げて欲しい」と話しました。

これを受けて当会は12月、北海道立水産孵化場の川村洋司主任研究員、北海道工業大学の柳井清治教授らの協力を得ながら、より具体的なアイディアを盛り込んだ「絶滅危機種イトウ再導入に向けての倶登山川落差工改修についての試案」を作成して同支庁に提出。年明けから協議が本格化する見込みです。

（写真と文・平田剛士）

イトウ復活大会議
尻別川の未来を考える
オビラメの会
2006年３月４日13時
ニセコ町民センター

くわしくは６ページ

「倶登山川落差工」ここが課題！

「絶滅危機種イトウ再導入に向けての倶登山川落差工改修についての試案」から

○落差工改修の必要性

倶登山川支流に放流した稚魚は、放流後の追跡調査によれば、これまでのところ順調に生育しています。イトウ稚魚は成長に伴い、下流部（尻別川本流など）に分散移動すると考えられますが、イトウには母川回帰の習性があることから、順調にいけば、稚魚が成熟する2008年ごろ以降に回帰してくると予想されます。ところが現在、倶登山川水系に少なくとも３カ所、回帰してくるイトウ親魚が自力では乗り越えられない落差工が存在します（下図ａ、ｂ、ｃ地点）。

○イトウの母川回帰について

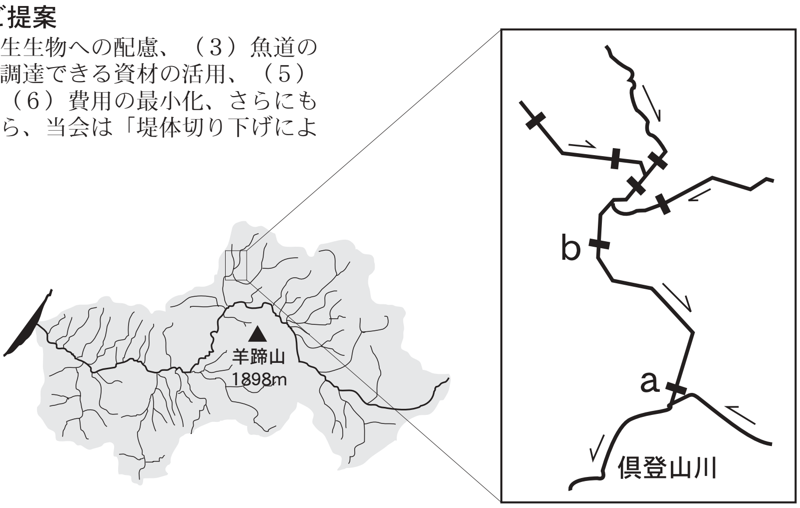
イトウは、雄で満４～５歳（尾叉長40cm前後）、雌で満６～10歳（同55cm前後）ごろから性成熟し始めます。また産卵後も死なずに15歳前後まで繁殖を繰り返すのがイトウの特長です。稚魚放流は2004年９月、同年夏に孵化した１年魚（０＋）で開始したため、順調に行けば2008年春に雄の一部が、また2010年春には雌の一部も成熟遡上することが期待されています。

○イトウの遡上能力について

イトウがどのようなデザインの落差なら支障なく乗り越えることができるのか、既存の研究資料はありません。しかし、たとえば石狩川水系空知川上流の繁殖河川の高さ70cm程度の落差工では、イトウが年によって遡上したりできなかったりしている様子が観察され、一応この程度の落差がイトウ遡上能力の限界だと考えられます。ただしナメ滝のように「泳ぎのぼり」が可能な場合は１m以上の落差でも通過できることが確認されています。

○「堤体切り下げによる泳ぎのぼり方式」のご提案

（１）イトウの遡上能力、（２）イトウ以外の水生生物への配慮、（３）魚道の目詰まり管理などのメンテナンス対策、（４）現地調達できる資材の活用、（５）市民団体や地域住民の工事・管理への参加の余地、（６）費用の最小化、さらにもちろん（７）従来の落差工機能の維持などの観点から、当会は「堤体切り下げによる泳ぎのぼり方式」を提案します。



○改修工事の順応管理について

当会の提案が、必ずしも意図通りの成果が得られるとは限りません。仮にイトウの遡上が可能になったとしても、同時に思わぬ副作用（下流からの外来種の侵入といった環境破壊など）を引き起こしてしまう可能性があります。この危険性をできるだけ低く抑えるために、全ての工程で「順応管理 adaptive management」を導入すべきです。工事前後で環境調査を実施して常に変化を把握しつつ、評価結果を恒常的に次の工程に反映させる手法です（下の表）。順応管理を実現するためには、できるだけ多様な主体の参加が望まれます。

落差工ａ

○住民参加型の事業について

当会は上記提案による工事を、行政機関に全面的に依存しようとは考えていません。できるだけ多くの地域住民のみなさまに祝福される結果を実現するため、努力を惜しみません。また、この事業自体を環境教育の素材として情報提供するなど、できるだけ多くの機関と連携できるよう工夫します。すでに当会は、イトウ再導入のためのモニタリング事業を独自に続けていますが、落差工改修工事や事後管理、モニタリングについても、出来る範囲での役割分担を望みます。

落差工ｂ

	伝統的な管理	順応管理（adaptive management）
不確実性	不確実性はほとんどないと考えられている。前提として政策は正しく、検証されない。	不確実性を認め、実験として管理をとらえることによって、政策自体を検証していく方針をとる。
科学と管理のつながり	つながりがない。科学的知識が政策を変えるために以下に使われるかが明白ではない。	直接的つながりがある。政策や管理に対し、科学が直接的に情報を提供する。
実験管理計画	ない。	ある。
実施方法	管理計画に対照区や繰り返しの設定をしない。	管理計画を実施するにあたって、対照区や改変区の設定を行なう。
学ぶ内容	現状を維持するように管理する。受容できない失敗から学ぶ。	現状は変化する対象として認識し、受容可能な失敗から学ぶ。

伝統的な管理と順応管理の違い（中村太士『流域一環』〈築地書館、1999〉ｐ109掲載の図を改変）

放流イトウのその後

元気です！

大光明　宏武（酪農学園大学、オビラメの会モニタリングチーム）

オビラメの会では絶滅の危機に瀕した尻別川のイトウ個体群を復元するべく、同川産のイトウから人工孵化させたイトウ稚魚を2004年9月に尻別川水系のＫ川に約700尾、Ｔ川に約1000尾、2005年6月に同じくＫ川に約1000尾、Ｔ川に約700尾と、２河川において２度にわたり放流しました。更に放流後の生息状況の把握及び今後の放流における課題の検討のため、以下に述べるモニタリングをＫ川で実施しました。なおＴ川ではブッシュが非常に多く調査精度が下がるため、モニタリングは実施していません。モニタリングは04年11月、05年６月、05年９月、05年11月の計４回実施しました。調査範囲は上流側約1.1kmが自然区間、下流側約1.9kmが改修区間となっている約３kmの区間です。この区間においてモニタリングを実施するにあたり、調査実施セクション（１セクション：60m）を自然区間に８箇所、改修区間に７箇所の計15箇所設けています。各セクションにおいて電気ショッカーを用いた３回反復の捕獲、環境計測を行いました。なお捕獲したイトウについては尾叉長（以下FL）及び重量(以下BW)を計測した後、捕獲セクション内に再放流しています。このモニタリングによりK川における放流イトウの越冬率、個体数変動、成長度合い等が明らかになってきました。以下04年９月放流魚は「秋放流」、05年6月放流魚は「春放流」とし、各モニタリングの結果と考察を述べます。

2004年11月のモニタリング結果

実捕獲尾数は95尾で、いずれも自然区間でのみ捕獲でき、改修区間では捕獲できませんでした。すなわち、調査範囲換算では316尾と、個体数は半減しました。要因として、①孵化後９月まで人工飼育下に置かれていた個体であるため、イトウ稚魚が本来定位し生息するはずの環境をうまく選択できずに下流へと流されてしまった。②イトウ稚魚本来の行動である浮上後、産卵支流から本流へと流下し分散する行動をとった。③外敵に捕食された。以上の３つが考えられますが、③については、K川で外敵として考えられる生物は水中ではアメマス、ハナカジカ、陸上では鳥やその他の小動物ですが、700尾から316尾にまで減った要因としては、③に挙げた外的となりうるアメマス、ハナカジカの個体数がさほど多くないことから①、②の可能性が強いと考えられます。

05年９月調査時の再捕獲個体
秋放流個体、尾叉長9.3mm

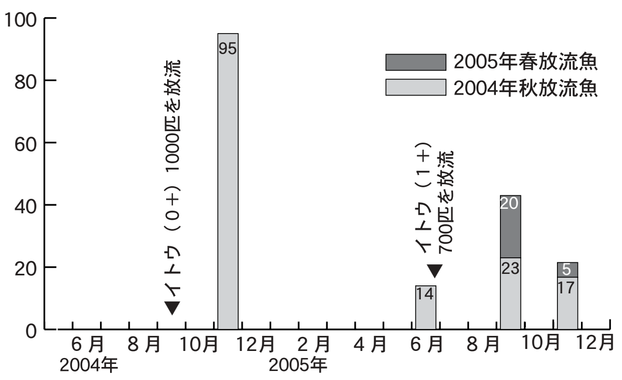
2005年６月のモニタリング結果

捕獲尾数は14尾と04年11月の95尾からさらに減っており、実捕獲数から導いた越冬率は15％となりました。この要因として、①越冬時に餓死した。②春の融雪増水で下流に流された。③イトウ稚魚の行動特性として流下分散した。④外敵に捕食された。以上の４つが考えられますが、この越冬率の場合も④よりも①、②、③の可能性が強いと考えられます。
（05年6月モニタリングは春放流より前に実施）

05年11月の再捕獲個体。秋放流個体、尾叉長12.6mm

2005年９月のモニタリング結果

秋放流個体を23尾、春放流個体を20尾捕獲しました。ここでお気づきかと思いますが、秋放流個体について05年6月の再捕獲では14尾で、05年9月では23尾と、若干増えました。この要因として①放流魚であること。②K川全域で捕獲を実施しているわけではないという２点が関係していると思われます。つまり、イトウは本来縄張りを有する魚ですが、高密度で飼育されていた放流魚であるためか、これまでの調査で、一ヶ所に数尾がかたまって捕獲される傾向がありました（①）。調査セクションに設定されていない箇所にもイトウが生息している可能性もあるため（②）、ここにいたイトウが次第に分散し調査セクションで確認されたとも考えられます。また改修区間に05年６月に人工カバー（イトウを含む魚が身を隠す場所）を設置したことに伴い、以前は改修区間に定位できなかったイトウが定位できるようになったため、改修区間においてもイトウを捕獲できるようになり、６月より９月の方が増えたのではないかと考えられます。



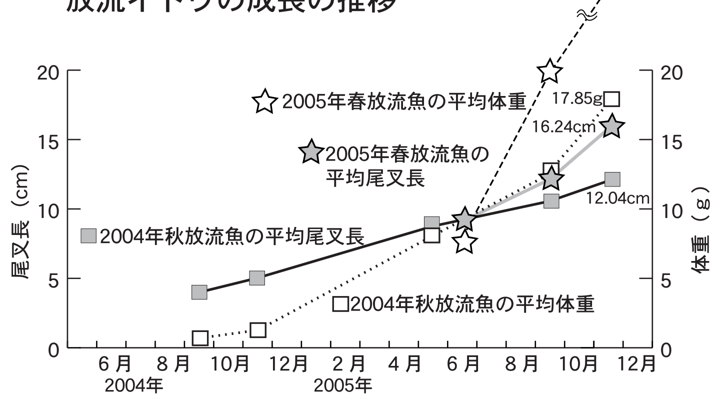
放流イトウの再捕獲尾数の推移

2005年11月のモニタリング結果

秋放流個体を17尾、春放流個体を５尾捕獲しました。この結果から判断すると、既に9月の時点で秋放流魚は春放流魚よりもK川での定着率が高いのではないかと思われます。秋放流魚は04年9月から自然状況下で生息し、越冬も経験しており、さらに縄張り意識を持ち始めていると判断するとこれも当然かもしれません。春放流魚に関してはまだ、この時点で越冬も未経験であり、秋放流魚と比べると放流時から時間が経っていないことから、まだ縄張り意識を持ち始めていない可能性もある。春放流魚はおそらく、産卵母川内で縄張りを有して定位する時期を過ぎたためK川ではキャパシティが小さすぎることから、母川に留まることなく流下していったのではないかと考えられます。

写真撮影／筆者

放流イトウの成長の推移



当会の活動に約160万円を寄贈

パタゴニア社「ワールド・トラウト・プログラム」

アウトドアウェア製造販売のパタゴニアが草の根団体を支援する「World Trout T-shirtsプログラム」で、日本のグループとして唯一、オビラメの会が現金約160万円の助成を受けました。授与式は11月19日、東京・星陵会館でおこなわれ、招待を受けて出席した草島清作会長がお礼を述べました。

Photo by Kaneaki Edo

北海道南、羊蹄山の麓を流れる尻別川流域の町、倶知安町の草島清作です。今般、「尻別川の未来を考えるオビラメの会」の会長としてパタゴニアさまのプロジェクト「ワールド・トラウト・Tシャツ」のご助成の授与式に参列させていただき、身に余る光栄と感激いたしております。

わたしたちは、イトウ棲息の南限であります北海道尻別川に棲息している日本最大の淡水魚イトウを保護し、増殖して昔の尻別川を取り戻すための活動を続けておりますが、幾星霜と続いてきた尻別川の遺伝子を持った環境保全のバロメーターとも言えるイトウが、無残にも絶滅の危機に直面している現状であります。何とかしてこの危機から救い出せないものかと長年思考して、全面的に助力してやれば何とかこの絶滅の危機から救い出せるとの結論に達したのであります。ほんの一寸の手助けで昔のように川いっぱい行きあう情景が復元できるのではないかと取り組んだのではありますが、イトウのことを知れば知るほどその大変さが身にしみるようになったのであります。

イトウを保護して増殖し放流することまででも、イトウをとりまく環境を考え合わせますと、自然環境の森羅万象を探り、阻害するものを100％取り除くことは不可能に近い状態であります。がしかし、いずれも人間の手で破壊した自然であります。人間の手で復元してやらなければならないのであります。わたしたちオビラメの会では、それらにかかる経費の捻出に困り果てていたのでありましたが、図らずもパタゴニアさまからのご援助を戴くことになり、その後計画が順調に進められまして、会では30年計画を立てて、年毎に計画の実行を進めていくことにしています。

今回、会の発足から11年目を迎えるにあたり（「30年計画」はスタートから７年目）、計画の３分の１、第１章のプロローグ、イトウ稚魚放流まで漕ぎ着けられました。これもひとえにパタゴニアさまのご援助の賜物と感謝申し上げております。パタゴニアさまのご援助がなければ、現在のオビラメの会も存在していないものとご援助に感謝いたしております。

お忙しい中から有能な社員の玉井秀樹さんを派遣していただき、会の実情をつぶさにご覧下されまして、そのご誠意につきましても心服をいたしております。また2002年、「イトウ保護フォーラム in ニセコ」をイトウ保護啓蒙活動の一環として開催いたしましたところ、パタゴニア日本支社長ビル・ヴァーリン氏にわざわざご来道たまわり、特別講演をたまわり、感激いたしたことを昨日のように覚えております。

わたしたち、今後、パタゴニアさまの誠の精神を体得し、必ずやご恩に報いるべく、イトウ保護のために誠心誠意尽くす所存であります。わたくし現在76歳、青春真っ盛りであります。残された人生をイトウ保護増殖のため、阻害となり障害となるものをひとつひとつ取り除き、乗り越えて必ずやイトウ資源の回復に精進する覚悟であります。

はなはだ略儀ではありますが、今回の授賞式の栄誉のお礼とを合わせて申し上げ、わたしの挨拶とします。ありがとうございました。

（2005年11月19日、東京・星陵会館「バンフ・マウンテン・フィルム・フェスティバル」の会場で）

いきなりですが……
オビラメ推薦図書コーナー

最新の研究成果にもとづいて書かれた淡水魚保全の手引き書。イトウについては、北海道立水産孵化場主任研究員で当会会員の川村洋司さんが「幻の魚イトウの生態とその保護」と題して執筆されています。一家に一冊の必読書。
信山社、定価4500円。
ISBN4-7972-2579-3

片野修・森誠一監修・編
『希少淡水魚の現在と未来—積極的保全のシナリオ—』

パタゴニア「World Trout T-shirts」プログラムとは

このプロジェクトは、絶滅に瀕する鮭科の魚の保護活動をおこなっている草の根グループをサポートするために企画されました。当社のオーガニックコットンTシャツに、絶滅が危惧されている鮭科の魚のイラストをプリントしたものを合計３種類発売し、１枚に付き５ドルのお金を助成金とします。そして、その３種類の魚の保護活動をおこなっている３グループに助成させていただきます。アメリカのカットスロートとアトランティックサーモン、そして日本のイトウが選ばれました。イラストは、アメリカの著名な画家、ジェームス・プロセック（James Prosek）氏の作品が使われています。

（玉井秀樹／パタゴニア大阪ストア、オビラメの会理事）

淡水魚保全シンポジウム岐阜大会に参加して　玉井秀樹

「里川の魚たちの現状と保全：守るべき身近な水辺環境」をテーマにした淡水魚保全シンポジウム岐阜大会（主催／淡水魚保全研究会、岐阜県）が2005年11月18日から19日にかけて大垣市情報工房で開催され、当会もポスター発表しました。大阪在住の玉井秀樹さんがリポートします。

撮影／玉井秀樹

11月18日、紅葉に染まる京都と滋賀の山々を通り過ぎ、岐阜のＪＲ大垣駅で電車を降りた。輪行してきた折りたたみ自転車を漕ぎながら会場となる大垣市情報工房へと向かう。途中、市内を流れる小川をいくつか眺めると、どれも予想以上に清い流れだった。山紫水明の地といわれる岐阜県は木曾三川が流れ、多くの山岳渓流を有する。シーズン中に遊んでもらった岐阜の渓魚たちの顔を思い出した。

今回のシンポジウムは、岐阜県と淡水魚保全研究会が主催。魚類の研究者だけでなく、行政の要職を務める人や秋篠宮文仁殿下（パネリスト）も参加した。

受付で合流した平田さんと一緒に、当会のカラーポスターを展示会場に貼る。イトウの大きな頭部写真が人目を引く。タイトルは、「『南限のイトウ』再導入を目指して」。イトウに関する基本的な情報をきちんと押さえつつ、オビラメ30年計画や、小学生によるイトウ稚魚の再導入、モニタリングチームによる調査結果についての記述もあり、イトウのことをよく知らない人にもわかりやすい内容であったと思う。２日間の会期の間に、多くの方が当会の展示スペースを訪れた。用意していたリーフレットも全てなくなってしまい、本州の大人だけでなく子供たちにとっても、「幻の魚」として名高いイトウへの関心の高さがうかがえた。

大ホールで行なわれた保全に関する基調講演やいくつものセッション、パネルディスカッションも学ぶところが多かったが、活動している人たちと直接話ができたポスター発表のほうが、個人的にはより有益だった。

当会以外の草の根グループや小学校の活動、地域の啓発活動、研究者の研究等を含め、ロビーでは約40ものポスター発表があった。なかでも、「魚道は『飛び跳ねる』より『泳ぎ上がる』ほうがよい事例　～階段式魚道の隔壁を斜路に改良した効果」と題した（株）北海道技術コンサルタントの発表や、「世界最南限のイワナ個体群『キリクチ』の保全生態学的研究　～1000年の歴史をもつ世界遺産の地『熊野』に、1000年後もキリクチがたわむれる沢を～」と題した研究者たちの発表、またブラックバスをはじめとする外来魚問題に関する発表が、非常に印象的だった。

今回のシンポで強く感じたのは３点。ひとつは、我々の文化や社会・経済活動の基盤となる生態系を保全していく動き、なかでも淡水魚の保全を促進する動きが、かなり活性化してきており、それが多くの人の自然に対する意識改革を進めたり、個々の行動に影響を与え始めているのではないかということ。

そして、淡水魚の保全には、行政、研究、地域が「三位一体」となって合意形成をはかり、行動を起こしていくことがやはり不可欠であるということ。

最後に、予断は許さないがそう遠くない将来、日本の在来淡水魚にとって暗黒の時代を抜け出すことができそうな気配と、それを実現するための力が、実は我々ひとりひとりにあることを、強く感じることができた。

イトウ保護フォーラム
2005 in さるふつ

イトウ保護連絡協議会と「猿払イトウの会」が共催するイトウ保護フォーラムが2005年11月13日、猿払村で開催されました。当会からは約10人が参加。小宮山英重・野生鮭研究所長の講演に続いて、当会会員の川村洋司さん（写真左、撮影＝平田剛士）、江戸謙顕さらがパネルディスカッションで意見を述べ合いました。次回は2006年11月4日、斜里町の「ゆめホール知床公民館ホール」で開催予定です。

◆ポケット　子育て　イトウの保護に学ぶ

2005年11月18日　京都新聞　朝刊

先日、テレビで「イトウ」という北海道にすむ淡水魚の話を紹介していました。川の状態が変わって絶滅寸前となり、オスとメスを捕獲、人工授精を成功させて絶滅を防いだそうです。併せて、稚魚が成魚になるまでに川の上流、中流、下流の環境を整えなければならないそうです。要するに、川を自然の状態に近いものにするのです。絶滅の危機感を抱いてから稚魚の放流まで10年かかったそうです。

この異変に気付かれたのは、子どものころからイトウを釣りに来ていた人でした。まず仲間を募り、本当に少なくなっているのかを調査し、原因を突き止めていかれました。並行して捕獲、人工授精が行われていたのです。育つ環境を整えなければ、いくら人工授精に成功しても魚は育ちません。

今、日本の子どもたちがおかしい…といわれる中、その異変には、専門家だけではなく、いろいろなところで子どもと接している人も気付いているでしょう。異変に気付いて少し何か改善されるまでに、人間の場合も最低10年ぐらいかかるのでしょうか？　生まれた命がどこかで途絶えてしまうことのないように（人間の場合は、見た目は育つのかもしれませんが）、環境を戻していく必要があるのだと思います。

市町村の単位でも、国の単位でも、人間の一生を考えた中で今必要なことは何かを考え、総合的に取り組む必要があるのでしょうね。

（宇治子育てを楽しむ会　迫きよみ）

当会が取材を受けた十一月五日放送のＮＨＫ番組「地球だい好き環境新時代～札幌発／幻の魚イトウ復活作戦」をもとに、『京都新聞』に書かれたコラムです。著者の迫さんのご快諾を得て転載しました。

基調講演　野田知佑氏

カヌーイスト

「尻別イトウ」再生を目指して

OBIRAME RESCUE

北海道・尻別川は「幻の巨大魚」イトウ（サケ科）の野生個体群が生息する南限の川です。しかし現在、イトウが自然繁殖している証拠はほとんど見つからず、個体群の絶滅が非常に心配されています。釣り人と市民、研究者たちでつくる当「尻別川の未来を考えるオビラメの会」は2001年、「オビラメ復活30年計画」を立てました。イトウたちが元気に暮らしていたかつての尻別川の再現を目指して、すでにモデル地区を設けて、尻別川産イトウ稚魚の放流とモニタリングをおこなうなど、「再導入」の実験を始めています。放流魚たちが成長して放流地点（尻別川支流上流部）にさかのぼってくるのは、早ければ2008年春。それまでに、途中にある堰堤の改修など、生息環境の復元を進めたいと考えています。私たち社会の知恵と技術を結集して「尻別イトウ」復活を図るために、このフォーラムを開催します。

イトウ復活大会議
尻別川の未来を考える
オビラメの会
2006年３月４日13時
ニセコ町民センター

イトウ復活大会議　「尻別イトウ」再生を目指して
【開催日】2006年３月４日（土曜）午後１時～
【会場】ニセコ町民センター
【入場料】無料
【主催】尻別川の未来を考えるオビラメの会
【協賛】地球環境基金
【お問い合わせ】オビラメの会事務局
電話・ファクス　0136-44-2472

「オビラメの会」は新入会を歓迎します

「尻別川の未来を考えるオビラメの会」は、会費と寄付金などで運営される市民団体です。みなさまのご支援・ご協力をよろしくお願い申し上げます。年会費は2000円です。郵便局の振り込み用紙に住所、氏名、電話番号を明記のうえ、入会希望と書き添えてお振り込み下さい（手数料はご負担願います）。会員期間はお振り込みいただいた日から年度末（５月）までです。概ね１月以内に会員証とニュースレターをお届けします。

■年会費2,000円
■郵便振替
02720-9-11016
■加入者名
「オビラメの会」

尻別川の未来を考えるオビラメの会は、会員のみなさまよりの会費と、寄付金およびセブンーイレブンみどりの基金、地球環境基金、パタゴニア日本支社、財団法人北海道新聞野生生物基金の助成金を受けて活動しています。

財団法人北海道新聞野生生物基金　patagonia committed to the core　セブン-イレブン みどりの基金

オビラメの会ニューズレター 第24号（2006年１月発行）
OBIRAME Newsletter No.24 , January 2006
■発行■　尻別川の未来を考える　オビラメの会
■編集■　平田剛士
■印刷■　（株）須田製版　（北海道滝川市栄町4-4-1）
■発送■　吉岡俊彦
■郵便振替■　02720-9-11016　加入者名「オビラメの会」
■オビラメの会事務局■
北海道虻田郡ニセコ町富士見65「ライズ」内
吉岡俊彦方　〒048-1501　TEL/FAX 0136-44-2472

copyright 2001-2005 Obirame Restoration Group

http://homepage3.nifty.com/huchen/Obirame/index.html

水と空気、みどりの大自然
ニセコが好きだ
楽しんだあとは川を語ろう
御食事処・酒房
ライズ
ニセコ町富士見65　TEL/FAX 44-2472
Email / itou110@estate.ocn.ne.jp